

第5回全国ムスリムミーティング

2018/11/10（於：慶應義塾大学三田キャンパス）

議論の要旨

「神をどのように伝えるか ～母と子による報告～」

1. ムスリムがマジョリティーである国で実践されている「イスラーム」をそのまま日本でも適用させようとする、あるいは、教えと、特定の国や地域の伝統、文化とを混同して子どもに伝える親が少なくない。
2. 日本社会の中で生きていくことを望んでいるムスリム 2 世も多い。親はこのことを理解し、日本の文化や宗教を一方向的に攻撃せず、尊重することが重要である。
3. 伝える内容が「正しい」ものであったとしても、親子の信頼関係がなければ、それは子どもの心に届かない。家庭内が子どもにとって居心地が良く、安心できて、楽しい場所であるよう努める。
4. 「愛している」。親のその一言で、子どもは安らぎを得る。信仰の度合いに関わらず、親には自分を受け入れてほしいと子どもは願っている。
5. 表面的なルールへの押し付けや実践の強制により、イスラームから離れるムスリム 2 世の事例が実在する。子どもは「アマーナ（神からの預かりもの）」である。大切に養育すると同時に、子どもを親の所有物にせず、一人の人間として尊重する。
6. 神の存在については、教科書的な教え方よりも、実生活の中で折に触れ伝えていくほうが、子どもの心に届きやすい。神のアーヤ（しるし）は、クルアーン以外にも、自然、日常生活の嬉しいことや悲しいこと、日本社会や人々のつながりの中など、いたるところに存在している。この世界はアーヤで満ち満ちていることを、親がまず感じ取り、そのことを子どもに伝えていく。
7. 子どもだけではなく、親も一緒に学び、成長していくことを忘れてはいけない。そうした親の背中を見て子は育つ。
8. 親や大人たちの神についての誤った理解や偏った考え、それらに基づく実践は、子どもたちを信仰から遠ざける要因になりかねない。例えば、努力をせずにすべてを神に委ねる態度は、子どもたちの目には極めて無責任な考えとして映る。慈悲深い存在であることを忘れて神について語れば、子どもの心には、イスラームは極めて窮屈で厳しい教えであると印象付けられる。
9. 子どもが信仰から一時的に離れても、子どもや自らの教育を、親は安易に「失敗」と決めつけてはいけない。人にはそれぞれ、気づきのタイミングがある。その将来の気づきのために、親は、子どもが幼いころより神について伝え、辛抱強く待つことが大切である。

取りまとめ責任者：

野中 葉

慶應義塾大学総合政策学部専任講師

慶應義塾大学 SFC 研究所イスラーム研究・ラボ代表